

目的 筆者らは先に、栄養判定法として、毛髪中シスチンの分析と、暗調応テストによって、学童の栄養判定を行なう方法を発表した。今回はその方法にもとづいて、学校給食の効果を長期にわたり、同一学童について追跡調査を行ない、発育の旺盛な時期の学童の栄養問題について検討し、学校給食の問題点について考察したので報告する。

方法 対象として岩手県の中心部で、給食センターのある金ヶ崎地区をえらび、約100名の学童について、7年間の追跡調査を行なった。すなわち年1回毛髪中シスチン含量と暗調応テストの分析を行ない、良質蛋白質とビタミン類の過不足を検討した。また食事調査も行なって、両面から学童の栄養状態の判定を行なった。

結果 以上の調査から次のことがわかった。

1 身体発育状況と栄養状態……学年が進むにつれて暗調応テスト値やシスチン含量は低下する傾向がみられ、学校給食の栄養所要量や給食時の配分等に、もっと詳細な検討が必要と思われた。

2 家庭食との関係……とくに農村においては、学校給食を週信する傾向があり学校給食実施期間中は、家庭食が粗末になる傾向がみられ、同一の学校給食を摂っていても、家庭食によって大きく支配されるように思われた。

3 男女差との関係……学年が進むにつれて女子が悪い結果を示めた。これは才二次成長が男子よりも早く現われるので、その点を考慮する必要があると思われた。